〔結論〕

Lecithin 加 lipiodol emulsion を用いることで腫瘍壊死効果は増強する．また，単純結節型，corona 陽性，periphery type の結節で径 3cm 以内の大きさであれば，より高い腫瘍壊死効果が期待できる．

論 文 審 査 の 要 旨

原発性肝癌に対する治療法の一つとして肝動脈塞栓療法（TAE）は一定の評価を得ており，治療法の選択肢の中に位置づけられている．しかしながら未だ効果が不充分である症例は多く，塞栓物質に関する検討も続けられている．本論文では塞栓物質として lecitin を加えた lipiodol emulsion による効果増強効果についての研究が行われた．

Lecitin 加 lipiodol emulsion はより小さな emulsion となり安定性も得られている．また小さな粒としたことにより深部まで塞栓効果が腫瘍内に停滞時間が延長し，抗腫瘍効果も増強することができた．

病態を検討すると，単純結節型，Corona 陽性，末梢型結節で 3cm 以内ではより高い腫瘍壊死効果が得られている．

59

氏名(生年月日)	牧 上 久仁子（マキ ガミ クニコ）
本　　籍	
学 位 の 種 類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第 2360 号
学位授与の日付	平成 18 年 2 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当（博士の学位論文提出者）
学 位 論 文 題 目	**精神科病院における疥癬集団発生対策―予防的治療実施と疫学的検討**
主 論 文 公 表 誌	日本衛生学雑誌　第 60 巻　第 4 号　450–460 頁　2005 年
論 文 審 査 委 員	（主査）教授　山口　直人
	（副査）教授　川島　　眞，吉岡　俊正

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

施設における疥癬集団発生に対して ivermectin 一斉投与が抑止効果を発揮できるか評価する．さらに疥癬集団発生時に入所者が疥癬を発症するリスクに影響する因子を疫学的に検討する．

〔対象および方法〕

70 床の精神科閉鎖病棟で発生した疥癬集団発生事例に介入し，観察を行った．外用ステロイド剤使用により限局型角化型疥癬となった男性患者が感染源となり，同病棟の 26 名の入所者が疥癬と診断され，うち 4 名は疥癬の再発をみた．週 1 回全入所者の皮膚チェックを行い，疥癬患者は診断がつき次第，1%γ-BHC ワセリン軟膏で治療を行ったが，新規の発症が続いたため，入所者 69 名全員に ivermectin 200μg/kg を一斉に投与し，全患者の皮膚所見をフォローアップし，集団感染の制御に対する効果をみた．

同時に発症者と非発症者を，年齢，体重，糖尿病合併の有無，日常生活動作能力，ステロイド剤外用の有無，初発患者との接触状況，徘徊等の問題行動の有無について比較し，疥癬発症に影響する要因を検討した．

〔結果〕

一斉治療に関連して，著明な副反応は認められなかった．一斉治療後，2 名の入所者が疥癬を発症したが，一斉治療後第 98 日目に集団発生は終息した．発症者と非発症者を比較して，疥癬発症を従属変数として，多変量解析を行ったところ，初発患者との病室の距離のみが統計学的に有意であった．

〔考察〕

本研究は医療施設内での疥癬集団発生に対するivermectin一斉投与の効果を評価した我が国初めての報告である．海外の事例では，疥癬には約1～3ヵ月の潜伏期があるため，無症状の接触者が後から発症し，先に治療を受けた患者に再感染を起こすことがあり，集団感染を終息させるには全員を同時に治療する一斉治療が必要と報告されている．本研究により，我が国の医療施設でも一斉治療が実施可能であること，安全性に問題がないこと，有効であることが示された．ただし，一斉投与の後に疥癬を発症した入所者がいたことは，1回のみのivermectin投与では疥癬予防効果が不十分であることを示唆しており，今後の検討課題である．

また，疥癬発症に初発患者との病室の距離が有意に影響していたことから，ヒゼンダニへの曝露状況が疥癬発症に重要であることが明らかとなった．この結果は集団発生の範囲の予測に有効であると考えられる．

〔結論〕

Ivermectin一斉投与は集団感染の制御に際して安全で利便性に優れた対策である．集団感染事例で疥癬発症に関して最も影響が大きいのはヒゼンダニへの曝露状況である．

論文審査の要旨

精神病院などの施設内で疥癬が集団発生した場合に，イベルメクチンの予防的な一斉投与が疥癬の流行を阻止できるかを検討した研究である．本研究では，施設内における集団発生に対して適切な介入研究を実施できたことの意義は大きい．本介入によって，イベルメクチンの予防的な一斉投与の安全性が示された．投与の有効性に関しては，今後さらに事例を積み重ねてゆき，どのような条件で一斉投与を行うべきかについて検討を進めるべきである．さらに，発症にかかわる因子を多変量解析等の統計手法を用いて分析し疫学研究として成果を上げることができた．本研究を通じて，疥癬の集団発生という問題に対して公衆衛生学的なアプローチによって対応方法の確立に向けた貢献ができたと言える．

60

氏名(生年月日)	徳本直彦（トクモト タダヒコ）
本籍	
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2361号
学位授与の日付	平成18年2月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**移植前HCV陽性患者に対するインターフェロンα投与の有用性に関する研究**
主論文公表誌	腎移植・血管外科　第17巻　第1号　20-25頁　2005年
論文審査委員	（主査）教授　東間　紘 （副査）教授　新田　孝作，野崎　幹弘

論文内容の要旨

〔目的〕

HCV肝炎ウイルスは末期腎不全患者，血液透析患者および腎移植患者では比較的よく遭遇する肝炎ウイルスである．長期的には肝硬変や肝臓癌を併発し，腎移植患者においてHCV肝炎が合併した場合には敗血症の病態に進行し致死的になることが報告されている．一方，HCVに対するインターフェロン治療は末期腎不全患者を対象にした研究では有効率は上昇すると報告されている．この研究において，われわれは腎移植前にHCV抗体陽性の血液透析患者に対し，インターフェロンαを投与しこれら患者における腎移植後の移植腎機能および肝機能について評価検討を行った．